

## 2020 年度後期 授業改善アンケート集計結果に対する意見 共通教育研究センター

共通教育研究センター長 有田 英也

全学共通教育科目は、教養科目、外国語科目、スポーツ・ウェルネス科目、IT 科目、初年次向けリテラシー科目である WRD 科目、データサイエンス科目から構成されています。後期開講科目のうちアンケート実施対象科目は179 科目あり、延べ7,779 人が受講しています。このうち144 科目でアンケートが実施され、延べ1,772 人の回答を得ました。この場を借りて、協力いただいた受講生の皆さんに感謝します。実施率は 80.4%とやや残念な結果でしたが、これは実施任意科目の実施率が50%と低かったからで、実施必須科目に限れば98.2%と非常に高い実施率です。授業改善のため、これからも多くの先生方にご協力をお願いします。ところが、アンケート回答率は22.8%と低調で、前期の23.1%と同様です。2019 年度前期の59.5%、後期の47.9%と比べて、低い水準にとどまっています。これは新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、すべての授業がオンラインになり、アンケートもオンラインで回答・回収されたことによります。ちなみに大学全体の回収率は22.4%でした。不回答率がそのまま欠席率ではないとしても、受講生の授業参加度を高めるための工夫が必要でしょう。

全体を総覧します。まず、遠隔授業の実態を見ましょう。延べ回答者1,772 名のうち「対面授業は南海ほど行われましたか？」という問いに「0回」と答えたのは延べ1518 名、全体の85.7%でした。大学全体でも85.1%がそう回答しています。授業の満足度の指標となる、「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」の平均は、5段階評価で4.27と、同じオンラインだった前期の3.95よりも改善され、2019 年度後期の4.13と比べても好転しました。突然のオンライン授業という難事に大学全体が直面したわけですが、後期に入って受講生も教員も遠隔授業に慣れて来たのだと推測されます。

13個の設問のうちオンライン授業に関わるものから見てゆきましょう。「円滑に授業を受けることができた」は4.34と前期の4.06より好転し、高得点を意味する4.0以上ですが、「教員との双方向のやりとり(質問への回答や課題の返却等)が十分にあった」は3.94(前期は3.58)にとどまったものの、「教員の授業資料は見やすかった」は4.21(前期3.92)、「教員は遠隔授業のツールを適切に使っていた」は4.23(前期3.96)と高得点をあげ、前期より顕著に改善されました。現在、全学共通教育科目では講義は原則オンデマンド配信になっており、今後の感染状況によっては、また国と社会のデジタル化の趨勢によっては、日本の多くの大学、特に文系学部で対面(面接)とオンラインの併用が予想されます。4.0以上の評価が全13項目のうち11項目に達して、2020年度前期の3項目を大きく上回り、2019年度後期の8項目、前期の7項目を凌駕したことで、授業の行く末に希望の光が見えて来ました。引き続き授業改善の努力を続けてゆきたいと思います。

スポーツ・ウェルネス実技など対面(面接)に復帰した科目があったことが、全般的な好転に寄与したのは確実です。スポーツ・ウェルネス実技で独自に実施した質問項目「授業で十分に運動することができた」の評価は4.86ときわめて高く、「あなたの健康、体力、生活習慣を見直す機会となった」の4.81とともに、コロナ禍の下で懸念される心身への負荷に、実技が何ほどか手を差し伸べられたのではないかと思われます。というのはスポーツ・ウェルネス実技の延べ履修者273名のうち延べ回答者数59名の平均で、「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」は4.80ときわめて高かったからです。

授業手法について反転授業、プレゼンテーション、課題解決型授業(PBL)の回答率(複数回答あり)は、それぞれ2.0%、11.2%、1.0%と高くはありませんが、これは本学の授業全体における回答率とさほど変わりません。また、受講生が身についたと実感している資質・能力は、いまだ「この分野の知識・学力」が86.3%と圧倒的で、それは大学全体の85.9%と同程度です。しかし、オンラインの1年間を通して、新聞各紙の教育特集で「教える」から「学ぶ手助けをする」への移行が言われてきたのはもっともなことであり、将来の授業手法について真摯に考え、実践してゆかねばと痛感します。